月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.146



杜宮市に怪異再び!?
あの名作がNintendo Switchで蘇る！
『東京ザナドゥeX+ for Nintendo Switch』

ティータがお嬢様に（？）な衣装が登場！
『英雄伝説 暁の軌跡』

レーヴェの切り開いた道
終幕の時、ついに迫る！
英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

ファルコムニュース
英雄伝説 碧の軌跡 いつか貴方とお茶会を

アドルの新イラストが到着！ さらに新キャラクターや新システムと情報盛りだくさん！

『イースX -NORDICS-』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



人気イラストレーター・toi8が手掛けるアドルのイラストが解禁！

さらに新キャラクターイラストや場面カットも続々到着！

『イース』シリーズ生誕35周年記念作にして、ナンバリング最新作となる『イースX』。今回はついにその詳細の第一報が到着した。今作の舞台となるのは、大小無数の島々が存在する北の海《オベリア湾》。バトルシステムも大幅に一新し、さらにはシリーズ初となる帆船の操作も可能に。今まで以上の大冒険となる『イースX』から目が離せない！

イースX -ノーディクス-

◆発売日：2023年予定
◆ジャンル：アクションRPG
◆対応機種：Nintendo Switch、PlayStation5、PlayStation4
◆プレイ人数：1人
◆CEROレーティング：審査予定

アドル・クリスティン

年齢：17歳　　武器：片手剣

本編の主人公。
後世に百余冊にも上る冒険日誌を遺した稀代の冒険家で、燃えるような赤い髪と好奇心溢れる澄んだ瞳を持つ。
彼にとっての初めての冒険の地・エステリアを17歳で後にし、その後セルセタの地へと向かったとされているが生家で発見された冒険日誌の一冊「北人の失楽園」によるとセルセタへ向かう前に、元盗賊のドギと共にオベリア湾へ立ち寄っていたことが判明している。











アタシは海賊(ノーマン)だ。
——場合によっちゃ次はオマエを殺す。







カージャ・バルタ

年齢：17歳
武器：手斧&円盾（ラウンドシールド）

バルタ水軍首領グリムソンの一人娘。海の荒くれ者たちを率いて堂々と海賊行為を働いており、その姿を目にしているカルナックの住人たちからは《海賊姫》として恐れられている。顔立ちは上品だが、手斧と円盾（ラウンドシールド）を携え、ノーマンらしい粗暴で残忍な戦いぶりを見せる。

2つのアクションを切り替える新バトルシステム「クロスアクション」とは？







『イース』シリーズといえばもちろんアクションRPGの金字塔。今作では、『イースIX』まで採用されていたバトルシステムが大幅に一新され、新たなシステムに挑戦している。今回判明したのは、メインキャラクターを操作しつつ、相棒の自動攻撃によるサポートで戦う「ソロモード」と、二人一組で同時に操作して敵を撃破する「コンビモード」の切り替えができる「クロスアクション」システムだ。プレイスタイルや敵の強さにあわせてシステムを切り替え、アクションを心ゆくまで満喫しよう。



スピード&連撃の「ソロモード」

アドルとカージャのどちらかひとりを操作して戦うモード。パートナーはAIによる自動攻撃を行うほか、操作キャラは戦闘中でもワンボタンで切り替え可能。
ステップ移動やダッシュを活かしたスピード重視のバトルがメインになっており、それぞれで異なるスキル攻撃をくり出せるほか、攻撃中にキャラを切り替えることでパートナーのカット攻撃が発生。そのままスキの無い連続攻撃を叩き込むことも可能になっている。さらに、一部の敵が放つスピードアタック（青いオーラを纏った攻撃）は「ソロモード」のダッシュで自動回避が可能。自動回避からのカウンター攻撃で周囲の敵も巻き込んでダメージを与えるなど、テクニカルなアクションを展開させることができる。













パワー＆攻防一体の「コンビモード」



アドルとカージャを同時に操作して戦うモード。「コンビモード」用のボタンを押すことで「ソロモード」から瞬時に切り替え可能。「コンビモード」では、同時攻撃による手数の多さでダメージがアップする一方、通常移動やダッシュ速度が大幅に低下。その代わりに専用アクションとして「ガード」が用意されている。ガードすると「Revenge ゲージ」が上昇し、この状態で「コンビモード」専用スキルを発動させると Revenge ゲージ上昇値が上乗せされ、大ダメージを与えることができる。
さらに、一部の敵が放つパワーアタック（赤いオーラを纏った攻撃）はジャストガードではじき返すことが可能。敵が大きく体勢を崩すので、一気に攻め込むチャンスだ。











WORLD GUIDE

港町カルナック



オベリア湾沿岸にある地方都市。
ロムン帝国セルセタ総督の統治下にあるはずだが、バルタ水軍に遠慮してか、さほど介入してくる気配がない。
そのためノーマンだけでなくイスパニ人も出入りし、交易によって独特の経済圏・文化圏を形成している。
ロムン帝国とバルタ水軍の板挟みで街自体に主導権はなく、特に若い住人たちの間には町長に対する不満が燻っているようだ。

東京ザナドゥ eX+ TOKYO XANADU for Nintendo Switch



日本ファルコムが贈る初の現代劇がNintendo Switchになって蘇る！

『東京ザナドゥ eX+ for Nintendo Switch』

2023年6月29日発売決定！

『東京ザナドゥeX+
for Nintendo Switch』
◆ジャンル：アクションRPG
◆対応機種：Nintendo Switch
◆発売日：2023年6月29日（木）
◆価格：パッケージ版4,800円（税抜）／ダウンロード版4,800円（税抜）

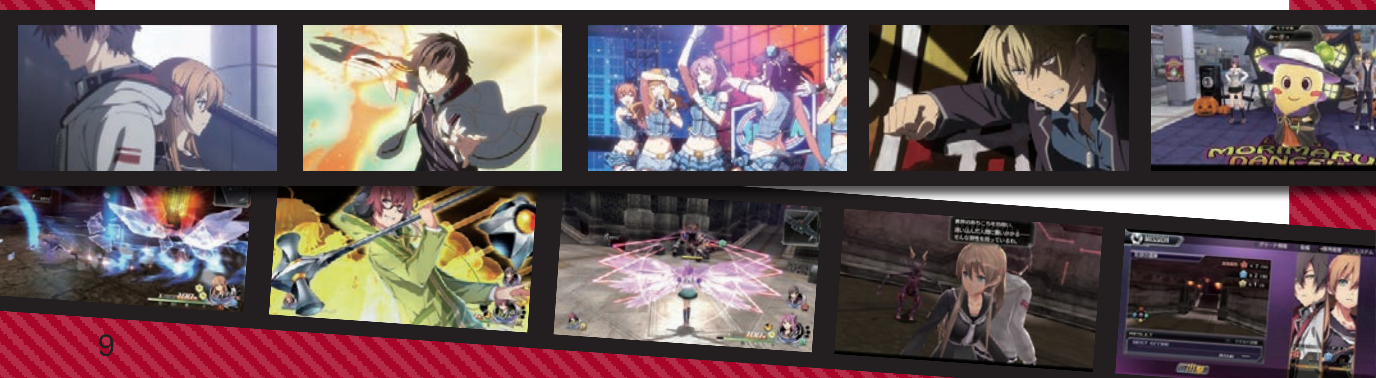
『東京ザナドゥeX+
for Nintendo Switch』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/txana/

予約特典
音楽 CD
『東京ザナドゥ Complete Works』



『イース』や『軌跡』、『ソーサリアン』に『ドラゴンスレイヤー』と、数々のファンタジー RPG を生みだしてきた日本ファルコムが、初の現代劇として 2015 年にリリースした『東京ザナドゥ』。
今どきの高校生・時坂洸が、時には学校に通い、時にはバイト、そんな中で、町を襲う謎の怪異に立ち向かっていくという新鮮な体験は、ファルコムファンの中でも確かな地位を築いた、まさに意欲作だ。2016 年には追加ストーリーなど様々な新要素が追加された『東京ザナドゥ eX+』としてリリース。そんな『東京ザナドゥ』が、約 7 年ぶりに Nintendo Switch 用として登場！

『東京ザナドゥ eX+ for Nintendo Switch』と銘打たれた本作は、『東京ザナドゥ eX+』をベースに各種操作を最適化。さらに、『軌跡』シリーズや『イース』シリーズで好評を博しているハイスピードモードも搭載。さらには、衣装やアクセサリーにアイテムといった、過去に配信された追加コンテンツもすべて収録した盛りだくさんな内容となっている。
予約特典として、主題歌や ED 曲をはじめ、劇中曲全 87 曲を収録した豪華サウンドトラックが用意されているほか、ダウンロード版は発売日前日まで 10% オフの特別価格で予約購入ができるなど、お得なキャンペーンが開催されているので、詳細は公式ホームページをチエック！

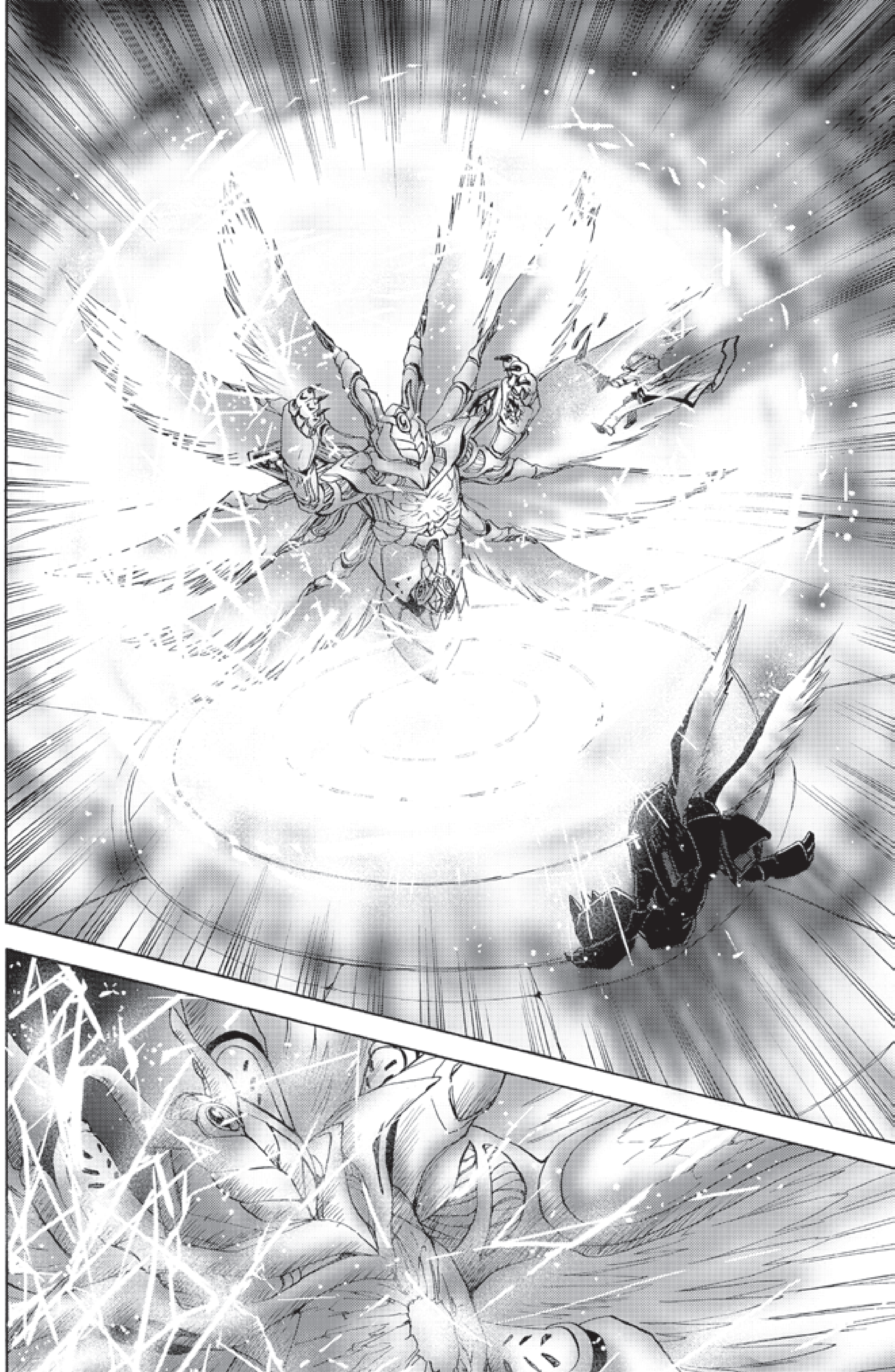




英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価:1000円（本体909円+税）
ISBN978-4-8021-3309-8
発行:フィールドワイ 発売:メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y



穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！
待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円+税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y





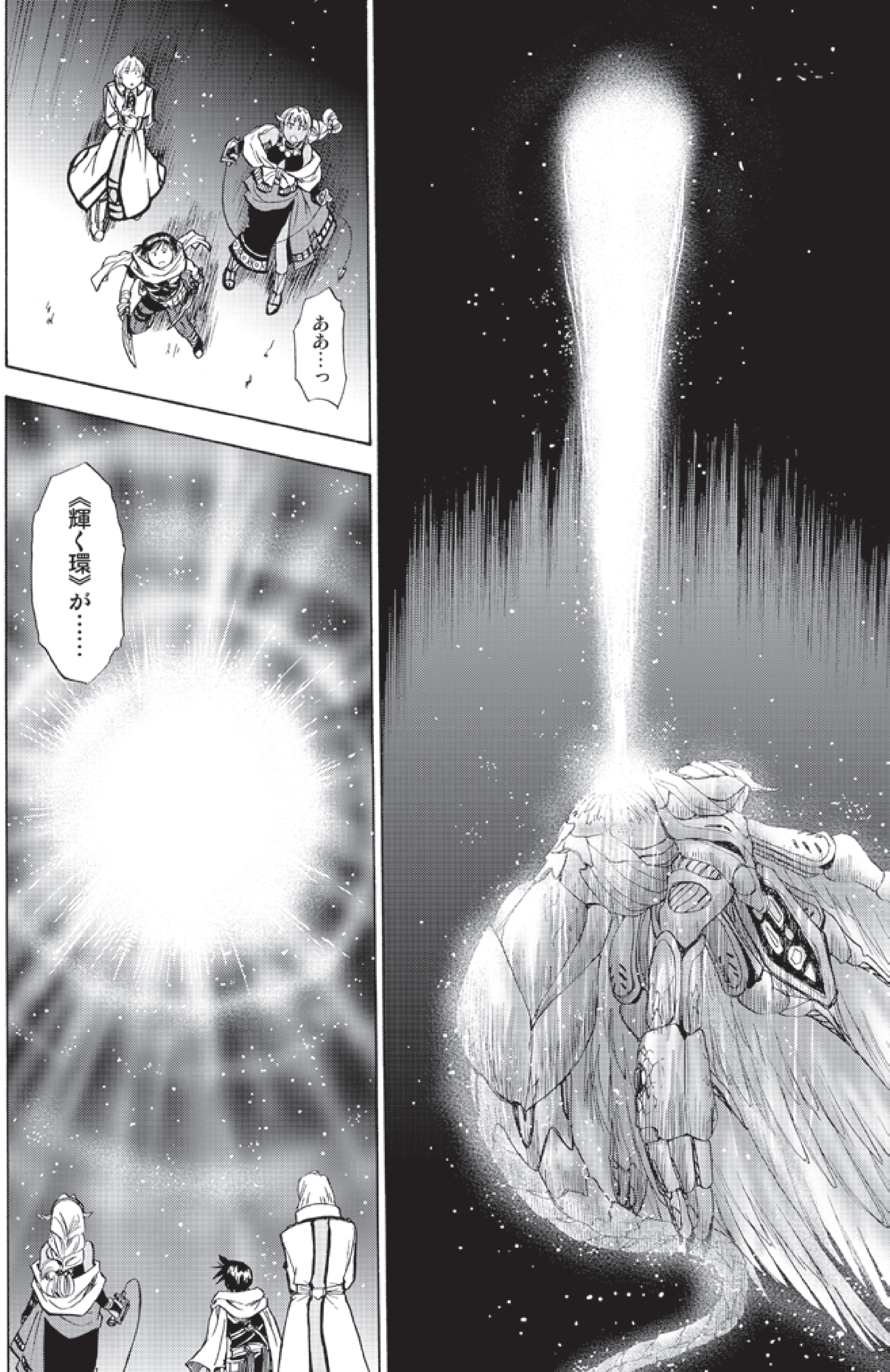
レーヴェ!!
俺に構うな!
道は拓いた!
あとはおまえたちで
切り拓け!

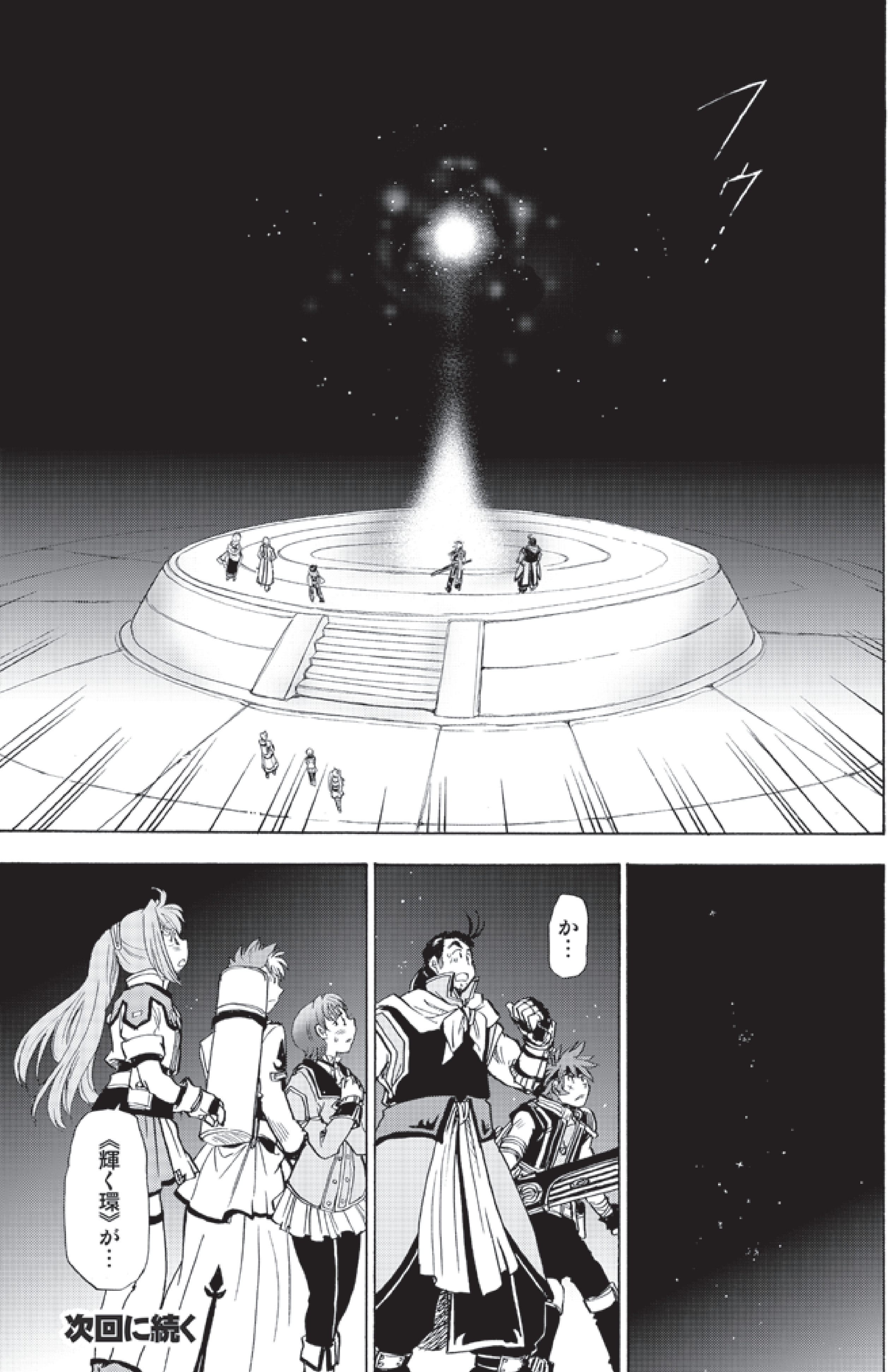

馬鹿な…
貴様らごときに…
この私が…！


…《環》よ！
私の中の《輝く環》よ！
無限の力を
私に…!!




グッ……
おおおおおお……!!


ああ…っ
《輝く環》が……


フゥ…
か…
《輝く環》が…
次回に続く


FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！　新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する!
リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥
啄木鳥しんき
定価：1000円（本体909円+税）　ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ　発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
◉フィールドワイ公式HPはこちら ➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら ➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

ラジオ番組『週刊ファルコムラジオ』が放送決定!!


徳井青空

文化放送では3月31日より、『イースシリーズ』『英雄伝説 軌跡シリーズ』『東京ザナドゥ』の魅力を紹介する15分間のスペシャルプログラム（※『内田理央のレコメン！FRIDAY』内で放送）『週刊ファルコムラジオ』（毎週金曜日　午後10：00）がスタート。番組の進行は、声優・徳井青空が担当し、月替わりで各ゲーム作品に登場するキャラクターを演じる声優がマンスリーMCとして出演予定。さらに、各ゲームのシリーズから主人公のキャラクターも番組の随所に登場することが決定しました。
『イースシリーズ』からは冒険家アドル・クリスティン（CV:梶裕貴）、『英雄伝説 軌跡シリーズ』からは『黎の軌跡』の主人公ヴァン・アークライド（CV:小野大輔）、『東京ザナドゥ』からは時坂洸（CV:浅沼晋太郎）がキャラクターとして出演します。


浅沼晋太郎


小野大輔


梶裕貴


Lynn

最初の4月のマンスリーMCは2023年発売予定の最新作『イースX -ノーディクス-』でヒロイン・カージャを演じる声優・Lynnが出演！

番組では、各作品の世界観にちなんだ企画を週替わりでお届け。『イースシリーズ』の企画では、主人公アドルがあらゆる場所へ旅をしてきた冒険譚がもとになっていることから「アドルが放浪！日本列島お国自慢」と題した企画を実施。アドルも冒険したくなるような、日本の観光名所やオススメしたい場所などをリスナーから募集して紹介します。

『英雄伝説 軌跡シリーズ』の企画では、「おれたちの軌跡」と題しマンスリーMCのこれまでの人生の軌跡を深く掘り下げるトークを展開していきます。『東京ザナドゥ』の企画では、「杜宮市民アンケート」と題し、Twitterの投票機能を活用してアンケートを実施、その結果を問題として出題するリスナー参加型の企画を行います。

番組では、出演者へのメッセージ、各ゲームシリーズの感想を下記のメールアドレスにて募集します。

「週刊ファルコムラジオ」番組概要

文化放送（FM91.6、AM1134）

- **■放送日時：** 毎週金曜日　午後10：00～10：15（『内田理央のレコメン！FRIDAY』内）
- **■メールアドレス：** falcom@joqr.net
- **■番組Twitte：** @falcomradio_qr

Steam® 用ソフトウェア『英雄伝説 黎の軌跡（クロノキセキ）』日本語版発売！

Steam® 用ソフトウェア『英雄伝説 黎の軌跡（クロノキセキ）』日本語版が発売中です。
PlayStation® 5版『英雄伝説 黎の軌跡』をベースに、マウス／キーボード操作への対応（カメラ操作含む）、ウルトラワイドモニターを含む各種高解像度への対応、最大360fps、V-Sync、FXAA、PC環境に応じたプリセット設定、グラフィック設定変更時のプレビュー、オートセーブ機能の拡充など、Steam® 版独自の機能が多数実装されています。
なお、Steam® 用『英雄伝説 黎の軌跡』日本語版をお買い上げいただいた場合、英語対応版発売時に自動で英語オプションが追加実装されます。（追加時期については未定）。



ウルトラワイドモニター対応画面



Steam® 『英雄伝説 黎の軌跡』日本語版
■価格：6,100円（税込）

関連ホームページ

『英雄伝説 黎の軌跡』Steam® ページ
store.steampowered.com
『英雄伝説 黎の軌跡』公式サイト（PlayStation.5版）
https://www.falcom.co.jp/kuro/ps5/
『NIS America』公式サイト
https://nisamerica.com/

『ヴァンの和スイーツ祭り』推しくじ好評販売中！



「英雄伝説 黎の軌跡II」のハーフアニバーサリーを記念した、『ヴァンの和スイーツ祭り』くじが期間限定で販売中。「黎の軌跡」のキャラクターに加え、「閃の軌跡」のキャラクターたちもお祭りに参加！

■販売期間
2023年3月17日（金）12：00 ～ 2023年4月26日（水）23：59まで
■商品内容
【A賞】アクリル時計（各シリーズ1種）
【B賞】ミニクッション（各シリーズ5種）
【C賞】アクリルスタンドキーホルダー（各シリーズ5種）
【D賞】貼ってはがせるカードステッカー（各シリーズ5種）
【E賞】丸缶バッジ（各シリーズ5種）

販売ページ

黎の軌跡Ⅱ 推しくじ
https://oshikuji.jp/item/?id=VWK2
閃の軌跡Ⅳ 推しくじ
https://oshikuji.jp/item/?id=VWS4

『イース・メモワール -フェルガナの誓い-』ポストカードプレゼントキャンペーン実施！ 全国ゲーム取り扱い店舗にて配布中!!

4月27日にNintendo Switch「イース・メモワール -フェルガナの誓い-」が発売されることを記念した、特製ポストカード（非売品）がゲームお取り扱いの対象店舗にて無料配布中です。



※店舗により配布方法が異なる場合がありますので、お近くの店舗にお問い合わせください。
※無くなり次第配布終了となります。ご了承ください。

ファルコムショップではデザインの異なる2種類をプレゼント！

ファルコムショップで商品（ゲーム・音楽CD・書籍・グッズなんでも可）をご購入いただいたお客様を対象に、発送1件につき特製ポストカード（2種）のうちランダムでどちらか1枚をプレゼントします。

※ゲームお取り扱い店舗にて配布中のポストカードとはデザインが異なります。
※無くなり次第配布終了となります。ご了承ください。

ファルコムショップ

https://falcom.shop/contents/coming_ysmf2023

FB ファルコムBOOKS

英雄伝説 零の軌跡
四つの運命

著者:田沢大典　イラスト:松竜



特務支援課は
ここから始まった!!

日本ファルコムの大ヒットRPG『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる!

原作:日本ファルコム
(『英雄伝説 空の軌跡』)

価格:1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4

全国書店にて大好評発売中!!

発行:フィールドワイ
発売:メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

FB ファルコムBOOKS

英雄伝説 零の軌跡
午後の紅茶にお砂糖を

著者:むらさきゆきや
イラスト:窪茶



日本ファルコムの大ヒット RPG『英雄伝説 零の軌跡／碧の軌跡』の主人公【特務支援課】は意外とまったり!? 本編とはひと味違った彼らのゆる～い毎日を描いて『月刊ファルコムマガジン』で大人気を博したノベライズ作品が単行本で登場!

好評発売中!!

定価:1,100円+税
ISBN:978-4-89610-255-0

発行:フィールドワイ
発売:メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡
アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
３月はあの名物公爵による期間限定イベントが開催！
さらに、ティータが衣装替えキャラクターとなって登場！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

期間限定イベント「Bracer's Kitchen !」が実装！

某所で休暇を満喫していたデュナン公爵はある日、
専属シェフが作りだした極上の料理に衝撃を受けた。
「これはまさに“新たな食との出会い”である！」
興奮冷めやらぬデュナンは即座にリベール王国全土を巻き込むイベントを思いついたのだった。









※このイベントは終了しています。

※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

3月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



プリンセス・ティータ

普段は明るく活発なティータがお姫様に。衣装も相まって、少し大人びた印象となった。ノートを片手に小鳥と戯れる姿はまさに深窓の令嬢？

『暁の軌跡』極秘資料館

リーヴ ＆ ノア（1年後）
エピローグにて登場したリーヴとノアの１年後の姿のラフスケッチ



「黒魔女・マリアベル」衣装デザインラフ
（2022 年 4 月実装）



「プリンセス・ティータ」衣装デザインラフ
（2023 年 3 月実装）





英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価:本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる!
激動のクライマックス!
発行:フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売:メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks



『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ!ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け!
愛と希望の流れ星!
魔法少女
まじかる★アリサ
決定稿
著:山下憲一
イラスト:さがら梨々
原作:日本ファルコム
好評発売中!
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行:フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売:メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

第3話

『フランとマフィアとラーメン屋台』

クロスベル警察に新設された特務支援課は、市民からの支援要請を受け、それを解決することを目的としている。
市民との窓口になってくれているのが、フラン・シーカーだった。
「あ、ロイドさん！」
カウンターのなかで書類を整理していた少女が顔をあげ、親しみのある笑みを浮かべる。
ピンクブラウンの髪をツインテールにまとめ、ちょっと間延びした平和そうな声をしている。
名前を呼ばれ、ロイドは片手を挙げた。
「やあ、近くまで来たから、報告に寄らせてもらったよ」
ロイド・バニングスは特務支援課のリーダーだ。
他の仲間たちも来ている。
フランが笑みを向けて。
「皆さんも、お疲れ様です～」
特務支援課の面々が、それぞれに返した。
ロイドは済ませたばかりの支援要請について報告する。
「――というわけで、それほど大変じゃなかったよ。他に要請は来てるかな？」
「はい。緊急というわけではないですが、街道に大型の魔獣が出たそうです。余裕があれば、お願いします」

「わかった。今から行ってみるよ……最近、こういう要請が増えてきた気がするな。魔獣が増えてるのか？」
「そうですね～。前は特務支援課が有名じゃなかったから、街道の魔獣とかは警察じゃなく、遊撃士協会（ギルド）とか、警備隊に相談してたんじゃないでしょうか」
「ああ、そうかもしれない。知名度が上がってきて頼ってもらえるようになったなら、いいことだな」
「本当ですね。わたしも受付として、嬉しいかぎりです～」
ロイドたちが会話を切り上げようとしたとき、ちょうど別の警察官がやってきた。
金髪の青年で、柔和と軟派の間くらいの笑みを見せる。
捜査官のレイモンドだ。
「おや～、特務支援課の皆さんじゃないか。おひさしぶり」
「こんにちは。レイモンドさん」
ロイドが挨拶すると、仲間たちも会釈した。
「君たちも、たまにはどうだい？」
レイモンドが口元でグラスを傾ける仕草を見せる。
ロイドは少しだけ考えて。
「飲み会（パーティー）ですか？」

「そう！　まぁ、未成年者もいるから食事会（パーティー）だけどね。警察署内の親睦を深めようってことで、捜査一課のメンバーが中心だけど、他の課も大歓迎だよ～？」
「なるほど……お誘いは嬉しいんですが……たった今、支援要請を受けたところなもので。すみません」
「ああ、そうなのか。支援課、すごく頑張ってるみたいだね」
「困ってる人たちの役に立ててるならいいんですけど」
「街の外の魔獣まで退治するんだって？　支援課って本当に何でもやるんだね」
「はい。支援要請を受ければ……だから、今日は街に戻るのが遅くなるかもしれないので」
「そういうことなら仕方ないな～」
　レイモンドが視線を転じて、フランのほうへ声をかける。
「フランちゃん、今夜、どう？」
「残念ですが、今日は先約があるんです！」
　申し訳なさそうにしつつも、先約って言葉のあたりで、にんまりと表情が緩んでいた。頬を染めたりして。
　レイモンドが目を丸くする。
「ありゃ……なんか、すっごく嬉しそうだね。も、もしかして、フランちゃん、恋人ができちゃったりしたんじゃ!?」
「あはは、そんなのできませんよ～」
　ぱたぱたと彼女は手を左右に振った。
「それじゃあ、先約って？　あっ、いや、話せたらでいいんだけどさ」
「べつに隠すことじゃなくて、今夜は、お姉ちゃんとデートなんです！　うふふっ」
「ああ……」
　レイモンドが疲れた顔をして肩を落とした。
　聞いていたロイドも汗をたらす。
　いつも笑顔がかわいいフラン・シーカーは警察署内でも人気の婦警さんだ。
　しかし、自他ともに認めるお姉ちゃん大好きっ子であり、警察署内に知らぬ者なしというほどだった。
「まぁ……フランちゃんは、そうだよね……」
「そうですよ～」
　レイモンドのぼやき声に、フランが嬉しそうにうなずいた。
　そのとき、受付に導力通信が入る。
　手が空いていた同じ受付嬢のレベッカが受話器を取った。
「こちらクロスベル警察…………はい……はい。ただいま替わります」
　レベッカが、フランに受話器を差し出してきた。

「え？　わたしですか？」
「はい」
受話器を受け取り、耳に当てたフランが、ひときわ表情を明るくする。
「お姉ちゃーん!?　なに？　どうしたの？　今夜が待ちきれなくなっちゃったの？　わたしも待ちきれないよ～」
『…………ごめん、フラン』
かすかに導力通信ごしの声が漏れてきた。
フランが愛してやまない姉のノエル・シーカーの声だった。
ただし、いつもは凛として明るい彼女が、なにやら暗い声をしている。
『……急な任務が入っちゃって』
「えっ!?」
『この埋め合わせは、次の休暇に絶対するから。ごめんね！』
「お、お姉ちゃん、待って！」
『もう集合の時間なの！　それじゃ――』
逃げるように導力通信が切断された。
どうやら、今夜のフランのデートはキャンセルされてしまったらしい。
固まっている彼女の手から、レベッカがそっと受話器を取り、導力通信機に戻した。

何事もなかったかのように。
いつもクールなレベッカである。
逆にいつも賑やかなフランが、らしからぬ脱力っぷりで、つっぷす。
「うわーーーん‼」
「……なんと言っていいやら」
ロイドは困ったように頬をかいた。
仲間たちも肩をすくめて、弱り顔だ。
ノエルは警備隊の曹長であり、まだ若いのに実力を高く評価されている。急な任務が入るのも信頼されていればこそだった。
わかっているから、ノエルを悪くは言わないフランだったが、すっかり落ちこんでいた。
重たい空気に耐えかねて、レイモンドが逃げだそうとする。
「あ～そうだ、報告書を出しておかないといけないんだ。それじゃあ！」
「レイモンドさん！」
フランに呼ばれて、足を止めた。
「え、えっと……なんだい？」
「わたし、今夜、行きますから！　食事会（パーティー）！」
「え？　あ、ああ、そう!?　じゃあ、六時になったら声かけるよ」

「はい。もう嫌なこととか忘れて楽しんじゃいましょ～」
ぐっと拳を握る。
切り替えが早いというか。前向きだなあ、と感心するロイドだった。

ちょっとラッキーだったかな――とレイモンドは思っていた。
ノエルの都合がつかなくなったのは、フランには残念なことだったが……おかげで、人気者の彼女を誘えたのだから。
フランは物腰がやわらかくて話しやすいし、なにかと気が利くし、なんといっても美人だ。
親睦のための食事会は華やいだ雰囲気になり、楽しい時間を過ごすことができた。
予定を二時間ほど過ぎて解散となったものの、盛り上がったからと思えばなんでもない。
繁華街のレストランから出ると、すっかり周りは暗くなっていた。
上司のドノバン警部が声をかけてくる。
「おい、レイモンド」
「あ、はい。なんですか、警部？」
「フランを送ってやれ。どうも、酔っ払ってるみたいだから」

「えっ⁉　フランちゃんは未成年ですよね⁉」
「グレープフルーツジュースを注文したが、店員が間違えてカクテルを出しちまったらしい。気付かないで飲んじまうなんて、フランらしいけどな」
「あらら……まぁ、飲み慣れてないと、逆にわからないですよね」
「それに、いくら警察官といっても、こんな夜更けに女の子をひとりで帰すもんじゃないからな」
「僕が送るんですか？」
「まるっきり逆方向ってわけでもないだろ」
「たしか、東通りでしたっけ？」
「じゃあな、任せたぞ。俺は仕事が残ってるから警察署に戻る」
「えっ⁉　もう真っ暗ですよ」
「日が昇るまでには終わるだろ。それとも、おまえが書類を片付けてくれるってのか？　そうしたら、俺がフランを送っていくが」
「フランちゃんを送っていきます！」
「うむ」
その彼女はどこにいるのか、と左右を見渡すと、ふらふらとおぼつかない足取りで、帰っていくところだった。
よりによって治安の悪い裏通りへ！

「わわっ、待った！」
　追いかけていって、腕をつかむ。
　彼女はいつもの笑顔を向けて。
「ん～？　あれ～、レイモンドさん？」
「フランちゃん、この時間に裏通りはマズイよ。行政区のほうから回ろう」
「あはは、そうですね！」
　彼女は鼻歌まじりに歩きだす。
　間違えて一杯だけ飲んだらしいが、けっこう酔ってるなぁ――と思いながら、レイモンドは並んで歩いた。
　足取りはしっかりしている。
　妙に上機嫌に見えるが、たまに受け答えがおかしかった。
　行政区から中央広場に港湾区に出たところで――

「ラーメン食べたい」
　フランがつぶやいた。
「え？」

「ほら、あそこに屋台がありますよ、レイモンドさん」
「本当だ。こんな時間でもやってるんだね～」
「これはもう、行くしかありません！」
　言いながら歩いて行く。
「ちょ……ちょっと待ってくれよ、フランちゃん」
「え～、なんですか？　いいですよ、わたしだけ食べていきますから、レイモンドさんは先に帰ってても」
「そんなことしたら、僕がドノバン警部に怒られちゃうよ」
「それじゃ、仕方ありませんね～」
「わかってくれたか」
「ふたりでラーメン食べていきましょう！」
「譲らない!?」
　やっぱり、彼女はちょっと酔ってるみたいだった。
　ひとりにはできないので、レイモンドは観念して夜のラーメン屋台に向かう。
　暖簾をあげて、フランが中央の席に座った。
「こんばんは～」
「ヘイ、らっしゃい」

「ラーメンください！」
「ふたつ？」
店主に尋ねられて、彼女の左隣に腰掛けたレイモンドはうなずいた。
「はい。できれば、すくなめで……」
横合いから、野太い声が割りこんでくる。
「大盛りだ！」
デカイ男だった。
暖簾をくぐるなり、注文し、同時にレイモンドの左側に腰掛ける。
角張った顔と、普通の男の倍くらいありそうな肩幅。
背広を着ていてもわかるほどの筋肉。
レイモンドは目を丸くした。
（……!?　こ、この男は……!?）
ガルシア・ロッシ！
自治州クロスベルで一番の勢力を誇るマフィア《ルバーチェ商会》を取り仕切る巨漢の若頭だった。
かつては猟兵として戦場で勇名を馳せ《キリングベア》の異名で呼ばれた男だ。
捜査一課でトップクラスの要注意人物に挙げられているガルシア・ロッシ。

その隣でラーメンを食べることになるとは。
店主が「ヘイ、大盛りひとつ」とうなずいて料理をはじめる。
レイモンドはかつてないほど背筋に冷や汗をかいた。
フランが楽しそうに笑う。
「あはは、大盛りだなんて、すごいですね～」
「ん？　ああ、忙しくて飯を食べる暇もなかったんでな」
縮こまってるレイモンドの頭越しに、上機嫌なフランと、キリングベアが会話していた。
レイモンドは心臓が止まるかと思った。
（まさか、フランちゃん、気付いてないのか……!?）
「おじさん、熊さんみたいに大きいですもんね～」
レイモンドは気を失うかと思った。
あのガルシア・ロッシを〝おじさん〟呼ばわりで、しかも〝熊〟である。
たしかに、熊のようにデカイが。
この熊は人食い熊だ。
ガルシアは鼻を鳴らして。
「フンッ……おじさんかよ。まだ老けこんだつもりはねぇが」
「そうなんですか。おいくつなんですか？」

「42歳だ」
「じゃあ、わたしから見たら、おじさんですよ～。お父さんと同じくらいですから！」
「ほう。嬢ちゃん、幾つだ？」
「今年で17歳になりました～」
「25も離れてるのか……まぁ、たしかに、おじさんだな」
「うふふっ……お父さんが生きてたら、こんな感じだったのかな～」
　レイモンドは黙って首を横に振った。
　いくらなんでも、キリングベアと同じ巨漢が、そうそういるはずもない。
　ガルシアが声を小さくして。
「そうか……父親を亡くしてんのか。そいつは、寂しいやな」
「あ……はい……でも平気です！　お姉ちゃんがいますから。わたしのお姉ちゃんは、すごいんです。警備隊の曹長なんですよ」
「ほう？　そいつは頼もしいな」
「わたしのことも、クロスベルの街も守ってくれるんです。悪い人なんか、やっつけちゃいますよ～」
　フランが拳をにぎって、ぶんぶん振り回す。
　ゴッとレイモンドの頭に当たったが、気付いてない様子だった。

　ガルシアが獰猛な牙を見せて笑う。
「ククク……そいつは、本当に頼もしいな」
　レイモンドは内心で悲鳴をあげていた。
（早く帰りたい！）
　ラーメンのいい匂いがしてきた頃、四人目の客が現れた。

「お隣、よろしいでしょうか？」
　暖簾をくぐり、フランの右隣の席を指さしたのは、細面で眼鏡をかけた青年だった。
　切れ味の鋭いナイフのような印象。
　フランがにこやかにうなずく。
「はい。空いてますよ～」
「どうも……」
　レイモンドは目を皿のようにして見つめた。
　肩が震える。
　屋台の明かりに照らされた青年の顔に、はっきりと見覚えがあった。

ガルシア・ロッシと同じく要注意人物としてファイルに載っている。
東方風の意匠を施した服装からしても間違いないだろう。
（ツァオ・リー⁉）
共和国の東方人街に本拠地を構える巨大犯罪組織《黒月（ヘイユエ）》の幹部であった。
屋台の店主が尋ねる。
「らっしゃい。なんにしましょ？」
「ネギラーメンをひとつ」
「ヘイ、ネギラーメンいっちょ。もうすぐ出来ますんで」
「はい」
フランが嬉しそうに声をあげる。
「うわ〜、美味しそうな匂いがしてきましたね。これこそ、ラーメンですよね！」
話しかけられて、ツァオは一瞬だけ意外そうな顔をしたが、微笑んでうなずいた。
「ええ、私の祖国とは味付けが違いますが、食べてみると、これがなかなか。今では、すっかり常連です」
「おおっ、楽しみですね〜。わたし、今日が初めてです！」
「なるほど……お仕事のお帰りですか？」
「はい！　あっ、パーティーやった後なんですけどね。もうすぐクロスベル創立記念祭じゃな

いですか」
「ええ」
「警察は警備で忙しくなるから、今のうちに騒いで、やる気を出しておこうって感じなんです」
「なるほど……警察の……そうですか」
「知ってますか？　最近、また悪いトコが増えて、もう大変なんですよ〜」
レイモンドが声にならない悲鳴をあげる。
その〝増えた悪いトコ〟のボスが、今、フランの横にいるツァオだ。
当人は気付いているだろうに、笑みを崩さない。
「ふふっ……すぐに片方は消えると思いますよ」
「だといいんですけどね〜。まぁ、みんな、記念祭を楽しみにしてるから、平和だといいんですけど」
「とても楽しみですね」
ツァオが含みのある表情を浮かべた。
視線を横に流す。
フランとレイモンドの向こう——ガルシアが不敵な笑みを返した。
「片方が消えるか？　そうだろうな。この街は、共和国のようにはいかねえってことだ」
「井の中の蛙は大海を知らず、といったところですね」

「てめぇ……」
「フッ……」
キリングベアと《黒月(ヘイユエ)》幹部の緊張が高まる。
そこに、どんぶりが出てきた。
「ヘイ、ラーメンお待ち！　お嬢ちゃんのぶんと、お兄ちゃんのぶんと、旦那が大盛り。お兄さんがネギラーメン」
「きった～～～!!」
フランが両手を挙げてバンザイした。
気勢を削がれ、ガルシアもツァオも闘気を収めた。
屋台の割り箸は、木製の箸箱に入っている。
普通の店のような筒に収めた形だと、砂埃などが溜まってしまうからだ。
その蓋付きの箸箱に、ガルシアとツァオが同時に手を伸ばした。
互いに端をつまんで睨み合う。
「ククク……俺が先に掴んだようだぜ？」
「ご冗談を。先だから、なんだと言うんです？　より強い者が次代の覇者になるのですよ」
「そうか？　じゃあ、残るのは俺のほうだな」
レイモンドは双方の闘気に押しつぶされそうになる。



呼吸さえままならない。
今、この場所から、クロスベル市の裏組織同士の全面戦争になるのではないか――とさえ思った。
無意識にテーブルの下でＥＮＩＧＭＡ（エニグマ）――戦術オーブメントのうち第５世代のものを指す。通信機能も備えている――を手に取った。
ラーメンを食べる振りして、声を絞り出す。
「た……たすけ……」
「あははっ、なにやってんですか。お箸は、ここを開けて取るんですよ～？」
ガルシアとツァオが掴んでいる箸箱の蓋を開けたのは、フランだった。
四本の割り箸を取りだして。
「はい、まず年長者の熊さんから」
「……あ、おう」
ガルシアは箸箱から手を離し、割り箸を受け取った。
彼の巨大な手に持たれると、箸が小さく見える。
次にフランは右隣へ。
「はい、どうぞ」
「フフ……ありがとうございます」
「レイモンドさんも」
「あ、ありがとう……」
弱々しく震える手で割り箸を受け取った。
正直、ラーメンを食べられるような精神状態ではなかったが、変に目立つのも恐ろしい。
レイモンドは息を殺してラーメンに口をつけた。
フランは気付いていない様子で、楽しげにおしゃべりしている。
「熊さんといえば……うちに熊のぬいぐるみがあるんですよ。お姉ちゃんと色違いでお揃いなんですけど」
「そうなのか」とガルシア。
「かわいらしいですね」とツァオ。
なぜか、ふたりとも付き合いよく彼女の話に耳を傾けていた。
「わたしのが、白色でバンバンなんです！」
「……バンバン？　なんで鉄砲の話になったんだ？」
首をかしげるガルシアに対して、ツァオは苦笑して。
「ぬいぐるみの名前ですね？」
「そうなんです～。お姉ちゃんは恥ずかしいからって名前をつけてないみたいなんですけど」
「ふんっ、そういうことか」

「フフ……鉄砲」
冷笑したツァオに、ガルシアが歯噛みする。
「ぐっ」
反撃の言葉も浮かばなかったらしく、自棄（やけ）のようにガルシアがラーメンをすすりはじめた。
すごい勢いだ。
フランが目を丸くする。
「おお、すごいですね！　さすが熊さんですね～」
「ふんっ、メシを食べるから力が出る。そして、メシは食べられるときに食べておく……それが生き残るためのコツだ」
「なるほど。なんか、たくさん食べる男の人ってカッコイイですよね～」
「…………腹が減ったから食べてるだけだがな。おい親父、替え玉だ」
「ヘイ、今すぐ」
ガルシアが、ツァオを横目に鼻で笑う。
「ククク……まぁ、そろばんばかり弾いてるヤツには、ネギが似合いだな」
「フッ……店主、激辛十倍を」
「ヘイ、激辛十倍で」
「むっ!?　おい親父、こっちは二十倍だ！」

「へ、ヘイ」
「では、三十倍で――」

辛みが目に沁みるような赤々としたラーメンが出てきた。
口に運んだガルシアが固まる。
「ぬっ!?」
「むむ……いや、これくらいは……」
辛さについてはツァオのほうが慣れているか。それでも、指先が微かに震えていた。
レイモンドはまだ最初のラーメンが半分も減っていない。
フランもおしゃべりばかりしていた。美味しそうに食べてはいるが、どこまでもマイペースだ。
「もうすこししたら、この辺も記念祭で賑やかになるんでしょうね～。今はエルム湖の水の音ばかりですけど」
今はラーメンをすする音がしているんじゃないかな？　とレイモンドは心の中でツッコミを入れた。

「わたし、お姉ちゃんとパレードを見に行こうと思ってるんですよね～……ふふっ……でも、ロイドさんも誘っちゃおうかな～？　なんて。ちょっと大胆発言ですかね⁉　きゃ～」
　レイモンドの背中を、ばしばしと叩いてきた。
「げほっ！　げほっ！」
　ツァオが目をすがめる。
「ロイドさん？　それは……特務支援課の？」
「あ、はい！　ご存知なんですか？」
「ええ……少しだけお話したことがありまして。もしかして、浅からぬ仲なのでしょうか？」
「えっ⁉　あははっ、そんなんじゃないですよ～。でも、お姉ちゃんとは、どうなのかな～って思ってるんです。わたしから見ると結構相性が良さそうな感じなんですけど……でも、エリィさんもいるしな～」
「ほほう……なかなか、ロイドさんも隅に置けませんね」
　ガルシアが水を片手につぶやく。
「ふんっ、あの小僧か……気の多いところは兄貴に似なかったようだな」
　捜査と関係ないところで特務支援課と裏組織との溝が深まった気がするレイモンドだった。
　もともと、警察組織とマフィアとでは犬猿の仲だが。
　フランがガルシアとツァオに尋ねる。

「みなさんは、記念祭はどうするご予定なんですか？」
「俺は仕事があるんでな。毎年、記念祭はミシュラムだ」
「おおっ、いいですね～ミシュラム！　一番の人気スポットじゃないですか！」
「仕事だから、お遊び気分じゃいられねえのさ。なんせ一年の半分近い稼ぎがあるんでな」
　レイモンドは心拍数が上がるのを感じた。
　マフィアが記念祭で何やら大きな取引をしているらしい、という噂は聞いたことがあったが……。
　本当だったのか。
　しかも、ミシュラムで。
　知ったところで捜査二課の自分では、どうしようもないし、どうせ捜査一課の連中は知っていることなのだろうけれど、クロスベルの闇を垣間見た気がしてレイモンドの肌が粟立った。
　ガルシアは〝知ったところで警察には何もできまい〟と思って口にしているのだ。
　ツァオも水で喉を冷ましてから。
「私は初めての記念祭なので、今回は観光を楽しもうかと思っていますよ」
「わ～、いいですね～」
「フフ……まぁ、仲間がどうするかは、わかりませんが」
　ガルシアが牙をむいた。

「ふんっ、なにやらネズミがチョロチョロしてやがるようだがな。どうせ何もできやしねえ」
「さて、それはどうでしょうか？」
　レイモンドは緊張を高めた。
（記念祭にルバーチェ商会と黒月(ヘイユエ)の衝突が⁉）
　多数の観光客で賑わうクロスベルで、抗争事件など起きたら、大変だ！
　やはり、警察官として、看過できない。
　レイモンドはカウンターの下でエニグマを握りしめた。
　使命感を持って声を絞り出す。
「……た……たすけ……て」
　精一杯だった。
　見ないで操作したので、ちゃんと連絡できているかわからない。
　そもそも、自分の居場所さえ伝えていないので、どんな意味があるのか。
　その間にもガルシアとツァオは口調こそ穏やかなものの、睨み合っていた。
「新参者が何をしたところで、この街は変わらねえ。どっかの小僧たちと同じだ」
「私は、彼らにも期待していますよ。大きな障害であろうとも打ち破るだけの力がある、と感じています……まぁ、その前に我々が変えてしまうかもしれませんがね」
「ククク……でかい花火でもあげようって腹か？」

「……正直、ここまで来ておいて、何もしないということはありえませんよ。我々は、そこまで優しくも悠長でもない」
（やはり、なにかあるのか⁉）
　レイモンドは恐ろしくなってきた。
　フランが腰を浮かせてはしゃぐ。
「おおっ、花火ですか⁉　あげちゃいますか！　大きいの、どかーんって、やっちゃいますか〜。いいですね〜」
　わずかに驚いた顔をしたツァオだったが、肩を揺らして笑った。
「フフフ……そうですね。せっかくのお祭りです。せいぜい楽しく盛り上げないと、わざわざ異国から来た意味がないというものです」
　ガルシアがキリングベアの笑みを浮かべていた。
「上等だ。何をしようとも、この街を仕切ってるのは俺たちだってことを思い知らせてやる」
「フフ……」
「ククク……」
「おおっ、いいですね〜。お祭りらしく盛り上がってきましたね！」
　フランがグラスを片手に掲げて。
「よし！　乾杯しましょう！　記念祭の前祝いってことで！」

「……いいでしょう。これも、なにかの縁」
「ふんっ……おい親父、一杯くれ」
「へイ、わりゃした！」
レイモンドは消えそうな声で頼む。
「あ、ひとつは水かお茶でお願いします」
フランは未成年なので、そのほうがいいだろう。
「へイ」
四つのグラスが置かれ、透明な液体が、なみなみと注がれた。ひとつは水だが。
（あれ？　まさか、僕も乾杯するのか……？）
どうやら、そういう流れだった。
レイモンドは震える手をグラスに伸ばす。ところが、横からフランが何の考えもなさそうな勢いでグラスを持っていってしまった。水じゃないやつを。
「ちょっ……フランちゃん⁉」
彼女はグラスを掲げて。
「はい、乾杯～‼」
「クククッ……今年も何も変わらんさ。いつも通りだ。乾杯！」
「フフ……さて、どうでしょうね……乾杯」

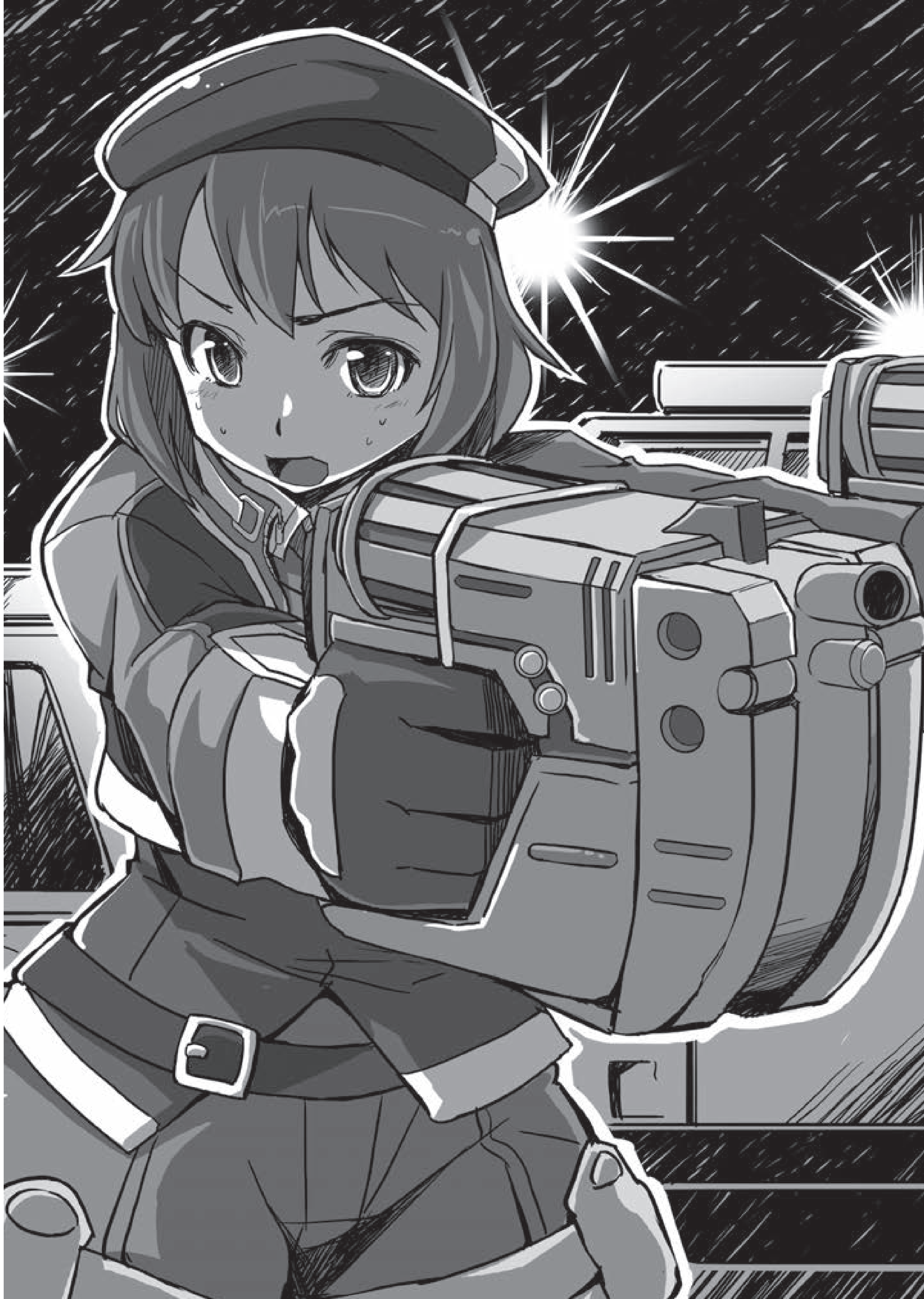
「ちょっ……フランちゃん、こっちじゃないと……」
レイモンドが水のグラスを彼女に差し出す。そこに、フランが手にしたグラスをゴッと当ててきた。
「かんぱ～～～い！」
「あっ」
グラスから飛んだ液体が、ガルシアの袖を濡らしてしまう。
「…………」
彼が目を細めた。
レイモンドは、心臓が止まった——と思った。
喉がからからに渇いて、全身の毛穴という毛穴から汗が噴き出す。
「…………すすすすみません、袖に……あ、その……」
また背中をバンバンと叩かれる。
「あははっ！　なに気にしてるんですか、レイモンドさん！　お祝いの席なんですから、そんな小さなこと言ってちゃらモテましぇんよ～？」
とうとう、フランは呂律が回らなくなってきた。
そのまま肩を倒して、もたれかかってくる。
やわらかくて、いい匂いが……。

（いや、それどころじゃない！）
　この状況を残して、自分だけ夢の国に旅立たれても、とっても困る。
　フランを支え、左右を見た。
　さっきまで、なんだかんだ言って機嫌よさそうにしていたガルシアとツァオが、今にも殺し合いを始めそうな恐ろしい表情をしている。
（な、な、なんだ⁉）
「チッ……」
「どうやら、お遊びはここまでのようです」
　二人が席を立った。
　殺気に満ちた声を交わす。
「ルバーチェ商会に手を出すってことは、覚悟できてんだろうな？」
「惜しいかな、貴方がトップではない。それが、そちらの弱点ですよ」
「うちの会長の悪口ならやめとけや。いろいろと恩があるんでな」
「フッ……」
　こうなったら、もう走って逃げるか？　とレイモンドは考える。
　しかし、フランを置いてはいけない。
（どうしたら？）

　そのとき、まばゆい光が周囲を照らし出した。

　ガチャガチャと金属音をさせて、武装した警備隊が列を成す。
　強烈な光は、警備隊の装甲車からのものだ。
　さらに、大型の導力銃を携えた警察官まで現れた。
　無数の照明を背に、数名が近づいてくる。
　レイモンドは呆然と眺めていた。
　支えていたフランが——どうやら、少し寝ていたらしい。目を開けると、まぶしそうにしつつも。
「あっ、お姉ちゃん⁉」
　叫んだ。
　光のなかを歩いてくる者たちが、駆け寄ってくる。
　そのひとりは、警備隊のノエル・シーカー曹長だった。
「フラン！」
「お姉ちゃん⁉　迎えに来てくれたの？　ありがと～」

「なに言ってるの、あなたが何かの事件に巻きこまれたって聞いて……どういうこと⁉」
「事件？　わたしたちは、ラーメン食べてただけだけど……なにかあったの？」
「えっ、ラーメン……食べてたの？　一緒に？」
「うん」
「……マフィアと？」
「なんのこと？」
　ノエルと一緒に来たのは、特務支援課の面々だった。
　ロイドが、ガルシアとツァオと向き合う。
「これは、いったい？」
「クック……こっちが聞きたいぜ」
「フッ……私たちは屋台で食事していただけですよ、ロイドさん」
「ええっ⁉」
　説明を求める視線が、ロイドたちからレイモンドに向けられた。
「ははは……こ、困ったな～」
　おそらくエニグマは、うまく操作できていたのだ。
　助けを求める声は受付嬢のレベッカに届いた。
　それが、どう伝わったのか……？



結果、港湾区に警備隊の装甲車と、重装備の警察官が列をなしていた。
ガルシアが高笑いする。
「ハッハッハッ！　俺の知らないうちに、屋台でラーメンを食べちゃいけねえって法律でもできたのかよ?」
「私は仕事が残っているので失礼しますよ、ロイドさん」
ツァオが丁寧に頭をさげた。
ロイドは笑みを浮かべる。
「お騒がせして、もうしわけありません。トラブルや事件がなかったのなら本当によかったです。これからも、ずっと、そうありたいものです」
「ククク……小僧が、言うじゃねえか」
「フフ……そうですね、平和が一番です。それでは、またいずれ」
ガルシアとツァオは最後に視線を交わすと、結局はなにも言わずに、それぞれの事務所へと帰っていった。
フランがノエルにへばりついている。
ロイドたちは警備隊と警察に事情を説明しにいった。
「…………」
呆然と立っていたレイモンドのエニグマが、けたたましい音をたてる。

「あ、はい！」
『おい、レイモンド、なにが起きた!?』
ドノバン警部だ。
かなり怒っている声だった。警察官の誤報で警備隊まで出動したとあっては当然か。
「えっと……屋台で……ちょっとした誤解がありまして〜」
『なんだと〜!?』
「す、すみません！」
『ばかもん！　明日までに詳細な報告書を用意しろ！』
「あわわ、明日まで〜!?」
『レイモンド！』
「は、はい！」
『ケガは……ないんだな?』
「あ……はい。あの……大丈夫です……僕もフランちゃんも」
『うむ。それならいい』
「警部……」
エニグマでの通信を終える。
フランはノエルに預けた。ロイドたちが警備隊や警察官への説明をしてくれて、彼らは粛々

と引き上げる。
やがて、何事もなかったかのようにレイモンドだけが残された。
今頃になって、屋台のラーメンの匂いが鼻に絡む。
食べたけど、ぜんぜん味を覚えてない。
「なんか、もったいなかったな〜」
振り向くと店主が立っていた。
「ああ、騒がしくしちゃって申し訳なかったね」
「いやいや、それより、お客さん」
「ん？」
「ラーメン三杯と、激辛ラーメン二杯と、ネギラーメン一杯、全部でこんだけなんで」
「……は？」
「まいどありゃっした！」
「ぼ……僕が……？」
「こんだけなんで！　ありゃっした！」
「あ、はい」
差し出された手に、レイモンドは財布からミラを支払う。
すっかり懐が寂しくなった。

あいつら、支払わずに帰りやがった！
警察官になって、これほど悪を憎んだことはない。
ぐっと拳を握りしめる。
港湾区から見える夜のエルム湖へと叫ぶ。
「おのれ、マフィアども！　ぜったいに許さないぞー‼」

第4話
『ジュリ・ラプソディー』



新市長ディーター・クロイスにより、西ゼムリア通商会議が開催された。
エレボニア帝国やカルバード共和国からクロスベル市に要人たちが集まってくる。
世界のトップたる人物たちを一目見よう、歴史的瞬間に立ち会おう、という観光客が押し寄せ、街は大騒ぎになっていた。
そんな高揚した雰囲気のなか――
中央広場へ、特務支援課の面々はやってきた。
青と白のジャケットを着た、ブラウンの髪の青年ロイド・バニングスは、クロスベル警察の特務支援課でリーダーを務める若手捜査官だ。
「かなり賑わってるな。まるで記念祭みたいだ」
「本当、すごいわね。これだけ大勢の人がいたらトラブルも増えて当然だわ」
うなずいたのは、パールグレイの髪の美しい少女だった。名をエリィ・マクダエルという。
このクロスベル自治州の議長を祖父に持ち、その補佐をしていたこともあるほどの才媛だ。
「あら？　もしかして……あそこにいるのは……」
「どうした、お嬢？」
彼女の視線を追いかけつつ、体格のいい赤毛の青年――ランディ・オルランドが声をかけた。
元警備隊員で、ときどき素行不良ではあるものの、頼れる兄貴分だ。
エリィがつぶやく。

「……今、シュリちゃんがいたような気がして」
「シュリが？」
ロイドもエリィの見ている先に視線を投げた。人混みのなかから、知り合いの顔を見つける。
髪を短く切って、ズボンを穿いている少女だった。
まるで少年のような格好をしているが、アルカンシェル劇場で稽古に励んでいる女優の卵だ。
まだ十三歳でしかないが、貧しい暮らしをしていたところ、大スターであるイリア・プラティエに才能を見いだされ、今や期待の大型新人である。
「ん？　アンタたちか」
「やあ、シュリ。今日は練習はお休みかい？」
「夕方まではな。今夜は夜に外国の偉い人たちを招いてのステージがあるからさ」
「なるほど。英気を養ってるわけか」
「オレは出番がないから関係ないんだけど……でも、イリアさんから休むように言われてさ」
ぶっきらぼうなしゃべり方も、男の子みたいだ。普段、他の人にはもうすこし愛嬌があるのだが、ロイドは特別に警戒心を向けられていた。
それというのも――
最初に出会ったときに、ロイドはシュリを男の子だと勘違いしてしまった。
すばしっこいシュリを怪我させずに捕まえるため、胴体を掴んだのだが……女性だと気付い

ていれば触らなかったところに全力で触ってしまった。
　それ以来、どうにも距離のある関係が続いている。ロイドとしては面目次第もないところだった。
　シュリが睨んでくる。
「ふん……アンタたちは今日も仕事かよ」
「ああ、通商会議の期間中は各国の要人が来てるし、観光客も多くなるからね。警察官が休みを取るわけにはいかないよ」
　横で聞いていたランディがぼやく。
「やれやれだぜ。それにしたって、もうすこし休みが欲しいね」
　エリィが苦笑しつつ、生真面目なことを言う。
「仕方ないわ。いつも以上に支援要請が来ているんだもの。通商会議に参加しているのは、いずれも歴史を変えうるような人物ばかり……警戒して警戒しすぎるということはないわ。警備に当たっている警察官たちが任務に集中できるよう、街中のトラブルは私たちが解決しないとね」
「ああ。そういう活動のひとつひとつは、きっとこの街（クロスベル）をよくすることに繋がってるはずだ」
　ロイドは決意を新たにした。
　シュリが溜息をつく。

「いいよな……」
「ん？　どうしたんだ、シュリ？」
「やることがあって羨ましいよ。どうにも、休みは苦手でさ。退屈すぎるし、オレなんか、ぜんぜん演技ができてなくって、あれもこれも練習しとかないとって……焦るばっかりなんだよな」
「なるほど。でも、休むのはイリアさんの指示なんだろう？」
「もちろん！　そうじゃなかったら、どこでだって……まぁ、イリアさんに言われたから、隠れて練習なんてしないけどさ。はぁ～……なぁ、今、何時だっけ？」
「え？　えっと……12時5分だな」
「なんだ、そんだけしか経ってないのか。あと3時間と55分もあるじゃん」
　シュリがうめいた。
　エリィが眉をひそめる。
「……だいぶ気が急いているようね」
　ランディが肩をすくめた。
「仕方ねえさ。アルカンシェルの一員ってだけで、並大抵のプレッシャーじゃないと思うぜ」
　ロイドは舞台のことはわからない。
　なにも手伝えることはないが、彼女の顔色を見ていると、ついつい心配になってしまう。

「大丈夫か、シュリ?」
「ん?　ああ、当然だろ。オレはイリアさんやリーシャ姉に鍛えてもらってるんだ。絶対に失敗なんかしない!」
「そういう意味じゃないんだが……」
　ちょっと気負いすぎではないだろうか?　と思うロイドだが……もう彼女はプロなのだから素人の自分が意見するなんて失礼だろう、と口をつぐんだ。
　シュリがふらふらと歩きはじめる。
「そろそろ行くよ。仕事の邪魔して悪かったな」
「あ、いや……またな、シュリ」
　彼女は片手を挙げて中央広場から、港湾区のほうへと歩いて行った。
　シュリを見送ってから、オーバルストアに向かう。
　ちょうど仲間が店から出てくるところだった。
　モスグリーンの帽子をかぶった少女は、ノエル・シーカー曹長。警備隊に所属しているが、現在は、特務支援課に出向している。
「ロイドさん、こっちです!」
「おつかれ、ノエル、ワジ」

「お待たせしたね」
　涼やかな笑みを浮かべたのは、ワジ・ヘミスフィアだった。不良グループ《テスタメンツ》のヘッドにもかかわらず、あれこれと伝手(つて)を使い、臨時の準メンバーとして支援課に所属している。
「フフ……君を待たせるなんて僕のポリシーに反するけれど、こればかりは許してほしい。後で存分にお詫びをさせてもらうからさ。勿論、ふたりきりでね」
「妙な言い方はしないでくれ。オーブメントの調整をしてただけなんだから」
「フフ……まぁ、そうなんだけどね」
「それで、もう終わったのか?」
　ロイドが問うと、ノエルが嬉しそうに目を細めた。
「はい!　ちゃんと調整してもらいました。《エニグマⅡ》のスロットを解放して、前に入手した《石化の刃》のクオーツをセットして――これで今まで以上に、皆さんのお役に立てます!」
「期待してるよ、ノエル。よろしく頼む」
「僕も同じかな」
「わかった。じゃあ、早速、支援要請を受けよう」
　ロイドの言葉を受けて、エリィが捜査手帳を開いた。
「えっと……

〝帝国からの演奏旅行で、共にクロスベルを訪れた演奏家が行方不明になった。
至急、探し出して頂けないだろうか？
詳しい事情は直接お話ししたい。
クロスベル駅にてお待ちしている〟
――こういう依頼みたいね」
「外国人の行方不明者か……不案内な土地で迷っているだけならともかく、なにか事件に巻きこまれた可能性もある。急いで探し出そう」
ロイドの言葉に、全員がうなずいた。



シュリは港湾区へとやってきた。
とくに用事があったわけではなく、たまたま足を向けたら、ここだった。
鉄柵に背を預け、時ならぬお祭りに沸く街の人々を眺める。
花壇に囲まれたスペースで、イベントが開かれていた。
ＭＷＬ（ミシュラム・ワンダーランド）のマスコットキャラクターである、みっしぃを大勢の観客が囲んでいる。
「みししっ☆　みんな、楽しんでる～？」

ノリのいい子供だけが返事をした。
みっしぃが首をかしげる。
「あれれ？　ちょっとしか聞こえないぞ～。みんな、楽しんでる～？」
ワーッと、さっきよりは大きな声が聞こえた。最初は照れていた大人たちも、今度は盛り上がっている。
みっしぃが片手を突きあげた。
「イェ～イ☆　レッツ、ダ～ンス！　みっしぃダンスショーだヨ～！」
着ぐるみなので、ドタドタした感じではあるのだが、その動きのなかにも機敏さが垣間見える。
もしかすると、あの足運びの全てが演技なのだろうか？
シュリは人垣の隙間から見えるみっしぃに、じっと目を凝らした。
ぶんぶん、と頭を振る。
（……オレは、あれより上手く演技できてるのか？）
「はぁ～……ばかかよ……オレはアルカンシェルの舞台で踊るんだぞ？　みっしぃを参考にしてどうすんだよ……」
イリアさんなら、なんでも舞台のヒントにしてしまうかもしれないが、まず自分には基本が大切だ――とシュリは思う。

休み中に踊ったり歌ったりは厳禁されているが、指でリズムを取るくらいは大丈夫だろう。
シュリは心の中で舞台で使われる曲を流し、たんたんと指で柵を叩いた。
そのメロディが、唐突に始まった演奏で中断される。
「ラララ〜ラララァ〜〜〜……」
港湾区の広場に歌いながら歩いてきたやつがいた。
ロイドより年上だろうか。美しい金髪で顔も整っている。いわゆる美男子だ。
装飾過剰な白いコートはセンスを疑うが、持っているリュートは素人が見てもひと目で高級品だとわかった。
そいつの歌が、シュリのリズムを上書きする。

「流れ行く　星の軌跡は……
道しるべ　君へ続く……
焦がれれば　想い　胸を裂き……
苦しさを　月が笑う……
叶うことなどない　はかない望みなら……
せめてひとつ　傷を残そう……
はじめての接吻　さよならの接吻……

君の涙を　琥珀にして……
永遠の愛　閉じ込めよう……」

その場で一回転した。
キラッと、こちらへウィンク☆
思わず、シュリは身を引いてしまった。
「な、なんだ？」
「フッ……まだまだボクの演奏が聴きたいようだね」
「えっ？　それは、もしかして、オレに言ってるのか？」
「仕方がない。観客が残っているうちは曲を奏でるのが、真の演奏家というものだ」
「なぁ、だから、その観客ってのは、オレのことなのか？」
シュリの問いかけなど無視して、彼は言葉を続ける。
「フッ……君は運がいい。偶然にもこの天才演奏家オリビエ・レンハイムのリサイタルに出くわす事ができたのだから」
「え、有名人……なのか？　とても、そうは思えないんだけど……名前とか聞いたこともないし、演奏も……」
「いいだろう。その期待の眼差しにお答えして《琥珀の愛》の2番を披露させていただくよ。

存分に楽しんで、一生の思い出にしてくれたまえ‼」
「待て待て、今、イベントやってるだろ⁉　そういうのって、マナー違反じゃないのか？」
「むっ？」
ようやく、オリビエと名乗った自称天才演奏家は、動きを止めてくれた。
だいぶ騒がしいので、実際にイベントの邪魔になるかはわからない。
シュリたちがいるのは、広場といっても端のほうだから、ほとんどの人に気付かれてすらいなかった。
それでも——
「……それでも……誰かが頑張って演じてるときに、邪魔するようなことすんなよ」
視線を中央のイベントに向ける。
みっしぃが踊りはじめていた。
「飛び入りも歓迎だよ～。みししっ☆」
着ぐるみなので、やっぱりドタドタしているのだが、不安な動きというものがない。熟練を感じさせる踊りだった。
オリビエがビシッと指さしてくる。
「なるほど。つまり君は、こう言いたいのか……真の演奏家ならば、あのダンスを踊って見せろ、と」

「はぁっ⁉」
「いいだろう、ボクも見ていたら、踊りたくなってきたところだ」
「いや……言ってねえよ⁉　つーか、アンタが踊りたくなっただけだろ⁉」
そもそも、演奏家とダンスは関係ないと思う。
しかし、彼は人の話を聞いていない。
「これを持っていてくれたまえ」
シュリの胸元に、オリビエがリュートを押しつけてきた。
思わず受け取ってしまう。
だって、すごく綺麗で、高級品だと一目でわかる。こんなの、もしも受け取らないで地面に落としてしまったら、大変だ！
ニコッ、とオリビエが嬉しそうに口元を緩めた。
さっそうと柵を飛び越えてしまう。
「ヘイ、そこのみっしぃ君！　ボクが飛び入りしようじゃないか！」
「みししっ、ノリのいいおにーさんだネ～！　カモン、カモン、エンジョーイ、ダンシーング☆」
「イェスッ‼」
「お、おい……ちょっと……⁉」
シュリはリュートを抱えたまま、その様子を見ていた。

意外と上手い。演奏もダンスも独特だが、それゆえの魅力がある。
しかし、これくらいの踊りができる者なら、アルカンシェル劇団にはいくらでもいる。
そうではなくて……
技術ではない部分にシュリは惹きつけられ、見つめてしまった。
（……すごく、楽しそうだな）
ダンスの最中――
慌てた様子でロイドたち支援課の面々がやってきた。緊張した様子でダンスを見つめる。
（……もしかして、なんか事件でもあったのか？）
みっしぃが中央でぐるぐる回りはじめた。
「さー、みんないくヨ～！
エンジョーイ、みっしぃ☆」
観客たちから大きな唱和があがった。そして、拍手喝采が起きる。
オリビエとみっしぃが、ガッシリと固い握手を交わした。
「ハッハッハ……さすがだね、みっしぃ君。キミのダンシング・センスには、はっきり言って脱帽したよ！」
「みししっ、おにーさんも、とっても上手だったヨ～☆」
オリビエがみっしぃと話をしている。

むしろ、旧知の友だちみたいに打ち解けていた。
盛り上がったみたいだから、あれはアリなのか？
イベントが一段落したところで、支援課のロイドたちが、ステージの前に立った。
オリビエが溜息をつく。
「おや……どうやら、迎えが来てしまったようだ」
「ミュラーさんが待っています。一緒に来てもらいますよ」
ロイドが一歩、前に出る。
オリビエが、みっしぃのほうを向いた。
「みっしぃ君……すまないが、ボクはここで退散させてもらうよ」
「ありゃりゃ、それはザンネン～。みししっ、今度はゼッタイ、ワンダーランドにも来てよネ～」
「フッ、その頼み……いつか必ず果たさせてもらおう。この別れはあまりに辛い。だからこそボクらの絆はかけがえのないものとなるだろう！
また会おう、親友（アディオス・アミーゴ）‼」
叫びながら、柵を跳び越えた。
ロイドが目を丸くする。
「ああっ⁉　ま、また逃げられた！」
驚愕したのは彼だけではない。広場の端で見ていたシュリもだった。
「ア、アイツ……どうすんだ、これ。おおい！」

気がついたときには、リュートを抱きかかえたまま走りだしていた。

特務支援課を振り切るだけのことはある。
彼は柵を跳び越え、道なき道を走り、野を駆ける獣のごとくだ。
住宅街までやってきた。
「フッ……ここまで来れば……」
「はぁ、はぁ、はぁ……ようやく、追いついたぜ！」
「アレッ⁉　君は、さっき港にいた子じゃないか」
「アンタなぁ……これ！」
シュリはリュートを突き返す。
オリビエが唖然となった。
「もしかして、これをボクに渡すために追いかけてきてくれたのかい？」
「アンタが急にいなくなるからだ。大切な物なんだろ」
「……信じられる人物だと思ったから預けたのだが……まさか、ここまで追いかけてきてくれるとは」

「オレは……絶対に盗みとか、しない」
シュリは拳を握った。
オリビエが黄金の髪をかきあげる。
「感動したよ。そんなにも……ボクの演奏を聴きたかったなんて！　走って追いかけてきてくれるなんて。ボクの歌のために」
「はぁ⁉」
「さぁ、今こそ君の期待に応えようじゃないか」
「いや、べつにいいって。よく考えたら、警察官がいたんだから渡せばよかった……あっ、そういや……ど、どうして、ロイドたちに追われてるんだ⁉」
突然いろいろなことが起こりすぎて、考えが足りていなかった。
シュリは後ずさりする。
「アンタ、犯罪者なのか？」
「フッ……友人が警察に依頼してまでボクを捜しているのさ。彼の心配性も相変わらずだよ。この程度の時を別々に過ごしたところで、ボクらの愛は薄れはしないのに」
「友だちなのに愛……？　よくわかんねえ。アンタ、嘘ついてないだろうな」
「ボクは清廉潔白さっ。それでは、熱烈なファンのリクエストに応えて演奏を…………むっ⁉」
突然、オリビエが表情をこわばらせた。

びくっ、とシュリは身を固くする。
「な、なんだ⁉」
「君！　その服は⁉」
「はぁ？　オレの服……どうかしたか？　べつに似合ってるとは思ってねえから放っとけ」
「そんなわけにはいかない。だいぶ汚れてしまってるじゃないか。このほつれも、さっきはなかったはず」
言われてみると――
鉄柵を乗り越えたり、草木の間を走ったりしたせいか、シュリの服には汚れや破れがあった。
「ああ……まぁ、このくらいなら直せるだろ」
昔は日常茶飯事だった。
ところが、恐いくらいオリビエが迫ってくる。
「ダメだ。そんなことはボクが許さない」
「な、なんだよ……ひとの格好にダメ出しする気か？　アンタにだけは言われたくないぞ」
「お詫びに服をプレゼントさせてくれたまえ！　なに、時間は取らせないよ。いい店があると聞いてるからね」
「え？　いいって。これくらい、オレは気にしないから」
「それではボクの気持ちが収まらない。この情熱を歌にすれば伝わるだろうか⁉」

「やめろ……まぁ、くれるっていうなら、いいかな。どうせ暇だし」
こんな住宅街の真ん中で演奏会をはじめられるよりはマシだと思った。
ふたりして歓楽街へ向かう。



月刊FALCOM MAGAZINE Vol.146

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.146プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『イースX -ノーディクス-』の新情報についての第一印象は？
　　アンケート②ファルコムのラジオを聴いたことがありますか？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：イースX -ノーディクス- 最新情報
2：東京ザナドゥ eX+ for Nintendo Switch 最新情報
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 碧の軌跡 いつか貴方とお茶会を

応募締め切り　4月26日（水）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。